

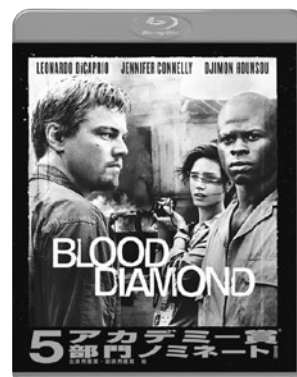
『ブラッド・ダイヤモンド』

2006 年／アメリカ／エドワード・ズウィック監督作品

戦争が終わればユートピアになる

会員 高島 敏秀 (40 期)

『ブラッド・ダイヤモンド』
ブルーレイ ¥2,381 + 税
DVD ¥1,429 + 税
ワーナー・ブラザース ホーム
エンターテインメント



1 ブラッド・ダイヤモンドとは「紛争（地域の）ダイヤモンド」あるいは「血塗られたダイヤモンド」という意味である。この映画の背景には、貧しい国の血で血を洗う争いの中で採掘されたダイヤを、贅沢な装飾品として取引対象としている先進国の業者や消費者に対する痛烈な批判がある。本作品も含めこれまで4度もアカデミー主演賞にノミネートされながら、今年度5度目でようやく賞を手にしたレオナルド・ディカプリオ主演である。宣伝文句ではアクション超大作とされており、娯楽映画としても十分に楽しめるが、本質は実話をもとにした社会派の映画であろう。ハリウッドと極めて関係の深いダイヤモンド業界を批判したためか、大々的な宣伝もできず、結果としてアカデミー賞も取れなかったのではないかと噂もある。

2 西アフリカのシエラレオネ共和国での1999年の話である。同国の面積は日本の約5分の1、人口は632万人で、1961年までイギリスの植民地であった。首都はフリータウン（なんと素晴らしい名称である）。1931年にダイヤモンド鉱が発見され、1950年代から採掘ラッシュが始まった。ダイヤモンド採掘の利権をめぐって1991年頃から内戦やクーデターが相次ぎ、国内秩序はぐちゃぐちゃとなった。

3 衝撃的な映像はたくさんある。反政府軍が集落や難民キャンプを襲う、そこでは大人とともにマシンガンを手にした10歳くらいの少年が妊婦だろうと幼い子供であろうと構わず撃ちまくる、反政府軍のリーダーは、現政権に投票ができないよう、俺たちはお前らの手をもらうと言って、村人にテーブルの前に両手を出させ、斧で手を切断してしまう、体格の良い男性は政府側

から奪ったダイヤモンドの鉱石場に連れて行って奴隷として働かせる、10歳くらいの少年も拉致したうえドラッグ漬けにして洗脳し、革命戦士として訓練して戦わせる、などである。

反政府軍は採掘場で採れたダイヤの原石を欧米の業者に売って武器を買い、闘争を継続するのである。

4 ダイヤの密輸業者として登場するのがディカプリオである。反政府軍から入手したダイヤを、「ここでは人々は生きるために殺しあう、これまでずっとそうしてきた」と言い、血塗られたダイヤの取引をも厭わない冷酷な立場で、隣国リベリアを通して欧米に輸出する。そして鉱石場で働かされていた際に高価なピンクダイヤを隠して埋めていた元漁師の男からそのダイヤを奪おうとして、拉致されて兵士とされたその男の息子や、難民となっていた妻や娘を救出することに協力するのである。

ディカプリオと美人ジャーナリスト（ジェニファー・コネリー）の活躍（素晴らしいことにラブシーンが一切ない）で、男性とその家族は救出され、イギリスに渡る。その男性の証言により、紛争ダイヤの売買を阻止する制度が導入されることとなる。

5 「Someday when the war is over, our world will be a paradise. 戦争が終わればユートピアになる」との見出しは、反政府軍に拉致されて兵士にされる少年が、家族と平穏に暮らしていた時に父親に話したセリフが印象に残ったので引用した。世界では常に戦争が存在する。我が祖国日本では戦争が終わってずいぶんと経ったが、果たしてユートピアにはなったのであろうか。